幻夢抄録ー目覚めー１１章

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻夢抄録―目覚め―１１章

【Ｎコード】

Ｎ１００７Ａ

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

氷魚の、母と兄の墓参りに行った二人。一時、平和な時間が流れる…が、そこに忍び寄る、黒い影が！？

墓参り（前書き）

こんばんわ、維月です。
『幻夢抄録』これからどんどんと濃くなっていきます。
サスペンスあり、ラブあり、あれ、殺陣もあるかな？
まぁ、楽しんで読んでくださいな♪

墓参り

朝方、瑪瑙は隣に寝ていたはずの、氷魚がいないのに気づき、ぼんやりと目を覚ました。
「ん～…氷魚、いねぇのか」
窓から射す陽光に、一瞬目を細め、瑪瑙はベッドから下りた。
彼女は、どうやら外にいるらしい。
井戸から、水をくみ上げるときに軋む、ロープの音と、水音が聞こえる。
洗濯をしているのだ。
着替えを済ませて階下に下りると、テーブルの上に、短い書きおきと朝食が置かれていた。
『おはよう、冷めないうちに食べてね』
氷魚の心遣いに、思わず笑みが浮かぶ。
手紙に微笑んで、瑪瑙は椅子に座った。

用意された朝食を食べていた瑪瑙は、ふと、聞こえてくる歌声に耳を澄ました。
「歌、あいつの？」
「故郷を棄て、大地を行く…旅は続いてる――――――」
それにしても、なんて歌だろう。
痛い。
ひしひしと、痛みが伝わってくる歌声だ。
もしかしたら、氷魚は、まだ後悔をしているのかも知れない。
そんな不安が、少し頭をもたげたが、瑪瑙は気にしないことにした。
「ひーお、おはよう」
庭に面した窓から、瑪瑙は顔を出した。
「わ！びっくりしたぁ…おはよう。やだ、もしかして、聞こえてた？」

「まぁな、どうしたんだ？その歌」
「ううん、なんでもないの。ちょっと歌っただけ、もう歌わないわ、ヘタだし」
氷魚は、ぺろっと、舌を出しておどけてみせる。
「ヘタじゃねぇけどよ、悲しい顔は似合わねぇよな、お前は」
「それは分かるかも…もう、食べ終わったの？」
「ああ、大方な。どっか行くのか？」
「うん、お墓参りかな？お花、持ってくんだぁ」
「俺も行く、なにかあってからじゃ、遅いからな」
「大丈夫よぉ、すぐ戻ってくるんだから」
「大丈夫じゃねぇっ、俺ぁ、絶っ対ついてくぞ」
「心配性なんだから、もう…じゃぁ花摘むから、手伝って？」
「分かった、ちと待ってろ」
そう言って、瑪瑙は窓から出した頭を、一度引っこめた。

花を摘みながら、氷魚は鼻歌を歌う。
「コラ、遊んでないで行くぞ？」
頭に乗せられた手に、氷魚の手が止まった。
呼ばれて振りむくと、瑪瑙が、いつの間に摘んだのか、花を片手に立っていた。
「こんなにたくさん…遅いと思ったら、摘んでくれたのね、ありがとっ」
大きな花束を抱えて、よろめいた氷魚の腕が、急に軽くなった。
瑪瑙が、半分から分けて、持ったからだ。

それから時は遡り、一昨日。
胡国宮殿内では、異変が生じていた。
それは、房室にいる息子を訪(おとな)った、母親の悲鳴で始まった。
「天河(てんが)、入りますよ、お腹が空いたでしょう？そろそろ食事を、天河？」

部屋の中を見まわすが、息子の姿は、どこにも見当たらない。
「誰かっ！誰か来て――――！？」
白磁の碗が砕け、慌てて、臣下が倒れた主を抱え起こす。
「奥方様！？お気を確かにっ」
「あぁ…何者かが、天河を狙ったのだわ、早く天河を捜して…」
息子、天河の姿は房室にはなく、窓が大きく開け放たれている。
薄い、絹のカーテンが、空しく揺れていた。
「きゃぁぁ、奥方様！お気を確かにっ、誰か医師を！誰かァっ」
「皇太子！まったく、どこへ行かれた…皇太子――――！？」
女官や衛士が、駆けまわる騒ぎの中、当の騒ぎの主は、ひっそりと物陰で、ため息をついていた。
「ふ――――‐‐まったく母上も大げさな、少し外に出るくらい、よいではないか」
しっかりと、水で気配を消して、天河は早々に宮殿を離れた。

再び時は、今に戻り…
母と兄の墓前で、合掌する氷魚と瑪瑙。
朝の墓地に、風が渡り、青草の穂先をなびかせていく。
「見ててね、二人とも…あたし、頑張るから」
「少し、散歩しながら帰るか？」
「うん、じゃあ、沢に寄ってもいい？手ぇ洗ってこうかな」

天河（前書き）

墓参りを終え、瑪瑙を撒いた氷魚は、そこで金髪をした、不思議な青年と出会っていた。
しかし、彼の正体は誰も、予想だにしないものだった！？

天河

その頃、宮殿内を抜け出し、山中を歩いていた天河は、見るも悲惨なあり様だった。
ぬかるみに足を取られて転び、絹の衣は泥まみれ。
威厳もなにも、あったものではない。
「…あた、あたた、参ったなこりゃ」
軽装とはいえ、明らかに目立つ格好の上、泥まみれときた。
この先には（自分の考えは別として）天敵妖魔の村があるが、よくて叩き出され、最悪の場合は殺されるのが、関の山だろう。
まったく、これはどうしたものか。
「とりあえず、沢に下りた方が、良さそうだな」

「だあっ！手ぇ洗うだけって言ったろうがっ、うわ！やめろ、水かけンなって」
「あはっ、固いこと言わないのー…気持ちいいわぁ」
氷魚の白い素足が、軽やかに水面を踊る。
「ってコラ！どこ行くんだよっ、氷魚っ」
見とれていて、気がつかなかった。
歯がみしながら、慌てて彼女の行く手を塞ぐ。
「だーい丈夫っ、すぐ戻るからっ」
しかし、彼女はするりと身を翻して、瑪瑙の脇を抜けた。
伸ばした手は、宙を掴む。
瑪瑙を撒いてから、息を整えて、氷魚は一人ごちる。
「ふぅ、ちょっと来すぎたね…奥って、こんなだっけ？」
緩やかな流れを渡ったところで、突如、彼女の足が止まった。
目が、合った。
ヒトがいたのだ。
「あっ…」

氷魚は、突然体が凍ったように動かなくなり、慌てて一歩を踏み出そうとするが、うまくいかず、転んでしまった。
「ひえ…ビショビショだぁ」
「大丈夫か！？すまない、驚かしてしまって、ヒトがいるとは思わなかったんだ。さ、手を」
「う、ううん…あたしこそ。あんた、見かけない顔だけど、旅人かなにか？泥だらけよね…なんだか」
差しだされた手を取って、氷魚は立ち直す。
「あ…いや、そんなトコかな？」
まさか、宮殿から逃げてきたとは言えない…
「ふぅん…すごい、きれいな金髪よね？これ…あたしも、昔は憧れてたっけな」
「昔？幼少の頃か？」
「え、ええ！？いや、そうじゃなくて…まぁいいわ、そうだっただけの話よ」
「そうか」
「うん、そう」
「そなた、名は？」
「あたし？あたしは氷魚、あンたの名前は？」
「俺は…天河、天河という」
「男！？女の人かと思ったよ…」
「女に、見えるのか？」
深々と、頷く氷魚に天河は、ぷっと吹き出した。
「面白いな、そなた」
「そお？」
この二人、気が合うのか、妙に意気投合している。

「氷魚は、異界から来たのか、そうか…」
「うん、色々と大変なんだよね、敵さんとも戦わなきゃないし」
「大変なのは、俺も一緒だな、今ごろなんて、多分宮殿内は大混乱

だろうなぁ…」
「どして？天河、なにかしたの？」
「皇太子がいなくなったのさ、ほんと、窮屈だよ…あそこは。何もかもが決めつけられて、逃げ出したくもなる」
「よく分かるのね、友達か、なにか？」
「いいや、それは…俺がその皇太子だからだよ」
天河は、面白そうに、ニヤリと笑った。
「こっ、皇太子！？って言われても、こんなドロドロじゃね…もうちょっと、威厳を持って言わなきゃ、そうは見えないわよ」
「フフ、それもそうだな」
「それにしても瑪瑙、遅いわね」
氷魚は、キョロキョロと回りを見まわす。
「連れがいたのか…はぐれたの？」
「うーん、はぐれたというか、何というか」
氷魚は、曖昧に言葉を濁した。
「ふむ、では迎えがくるまで、ここにいればいいさ」
よっこらせ、と氷魚の隣に、天河は腰を降ろした。
「でも…彼を捜さなくちゃ」
「彼、従者か？」
「ううん、瑪瑙はあたしの夫よ」
「そなた、いくつだ！？夫がいるようには見えぬが…」
「女に年をきくなんて野暮ね――――教えなーい」
ひどく驚く天河に、氷魚はそっぽを向けた。
「後宮の娘より、かなり若く見えるんだが」
「そういう天河こそ、いくつなの？」
「いくつに見える？」
面白そうに、含み笑う天河。
「そうねぇ…二十歳くらいかしら？」
「おしい、２５だよ」
「ふーん…結構、若く見えるね」

その時、氷魚は背後から急に掬いあげられ、悲鳴を上げた。
「きゃっ！ちょっとやだっ、どこ触ってンのよ――！」
暴れる氷魚を、聞き慣れた、中音の声が制する。
「落ちつけっ、俺だ、氷魚！」
「瑪瑙！？もぅ～…バカバカ、遅かったじゃない～」
べったりと懐く氷魚に、多少顔がゆるむが、瑪瑙は、努めて緊張感を持って言った。
「結界が張ってあった。てめぇ、何者だっ、見たところ敵属のようだが…何をしにきた！」
「ちょっと、瑪瑙…待って、放してってば、どういうこと？天河が、なにかしたの？」
「氷魚、こいつは…俺たちにとって敵属だ！」
「敵、属って…村を襲ったのが、天河と同属の妖魔ってこと！？」
氷魚は、半歩後じさった。
「そうだ！さぁて、どうしてくれようかっ」
「ちょっ、ちょっと待ってくれよ！なにも、頭から決めつけなくてもいいだろうに、そりゃ、確かに俺は、お前たちから見たら敵になるかもしれんが、そのすべての者が、そうとは限らんだろう？」
天河は、腰の刀を地面に放り投げた。
「一体、何のつもりだっ」
威嚇して、唸る瑪瑙。
「つもりもなにも、俺だって、好きであんな場所にいたわけじゃない…」
「そ、そう、瑪瑙…天河はね、そこから逃げてきたのよ」
「俺さぁ、そういうのって、めんどくさいんだよねー…性に合わないっていうか」
暢気に欠伸して、縦に伸びをする天河。
いつの間にか、語調が変わっている。
「ったく氷魚、お前って奴ァ…なんでも懐くんじゃねぇ！なんてこった」

瑪瑙は、呆れながら、頭を抱えた。
「あ、ちなみに俺、皇太子ねー」
「げ！？」
一瞬にして、石化する瑪瑙。
「あたしも、最初は驚いたけどさぁ…天河、あなたやっぱり貫禄ないわよ、こんな泥だらけじゃ、でも、このまま放っとくわけにも行かないしねぇ」
氷魚は、ちらりと瑪瑙を見た。
「な！？氷魚っ、お前まさか、こいつを村に連れて行くつもりか！」
「だってぇ…」
「じゃぁさ、要は敵に見えなきゃいいんだろ？変化して、妖気を消せばいい。変化は得意だよ」
ニカッと、人なつっこく笑う天河。
「そういうこっじゃねぇ！」
「まーまー、そうカリカリしないでさ、気楽にいこうよ」
「いけるか！！」
天河の金髪は、みるみるうちに変色し、紺青色になっていく。
「これでよし、妖気は、ちゃんと消したよ」
「すごーい、化けるなんて…なんだかタヌキかキツネみたい！」
「おや、いい目だね…本性を見抜かれちゃった」
はしゃぐ氷魚に、相変わらず、天河は面白そうだ。
「え、そうなの！？ホントに狐なの？」
「そっ」
「氷魚！戻るんだろっ、さっさと行くぞっ、懐くな！」
瑪瑙は、二人の間に割ってはいる。
「うんっ、天河、案内するからついてきて」
「すまないな、これから『も』世話になる」
「も、って…居すわンのかよ！？」
吼える瑪瑙。
「そうカリカリするなって」

「うるせぇっ！いいか、妙な動きしてみろっ、叩きだしてやるからな！」
「ごめんね、天河。この人、口悪くて…気を悪くしないでね？あんな事言ってるけど、ホントは優しいのよ」
「だっ、誰がだっ、氷魚っ、いいから行くぞ、早くこい！」
「はーいはい」

玄関のドアが閉まる。
瑪瑙は、落ちつきなげに、そわそわしていた。
「ごめんね、狭いけど我慢してね？あ、そこ座って」
「いいや、匿ってもらって、そんな恩知らずなことは言わんよ」
「そう、よかった。とりあえず、この服をどうにかしなくちゃね…待ってて、服探してくるから」
ぱたぱた、と走っていった氷魚の背中を見送り、天河は、未だ警戒を解くことなく、壁により掛かっている瑪瑙に話しかけた。
「愛(う)い娘だな…」
「やらねぇぞ」
「心配ない、やれやれ剣呑だなぁ」
「けっ…」
「なぁ、もう少し、警戒を解いたらどうだ？」
「できるかよっ！そんなの」
「俺は…いわば、謀反者だよ。敵属だから殺すとか…戦だの、俺には重すぎる。どうも、周りと考えが合わなくてなぁ…厭(いや)になって逃げてきたんだよ、周りに左右されるだけの暮らしからね」
「そう簡単には、受け入れられねぇよ」
戸惑いながら、瑪瑙は、唸るように小さく言った。
重苦しい静寂が流れるが、それを破って、氷魚が飛び込んできた。
「ごめんねっ、探すのに手間取っちゃって、瑪瑙の古着だけど、着られる？」
「ああ、すまないな…ありがとう」

「ううん、部屋は二階の端ね…狭くてごめんね、ホント」
「着替えてくるよ、これじゃ、ちょっとキツイし」
「うん…」

天河が行ってしまってから、瑪瑙は、そっと氷魚に話しかける。
「無理…してンだろ？氷魚」
「ううん、大丈夫よ…天河は敵属だけど、邪気がないわ。信じられそう」
「お前が、そういうなら…ホントに、大丈夫か？」
「相変わらず、心配性ね…うぅっ！」
氷魚は、突然襲った吐き気に、口を押さえて屈みこんだ。
「おいっ、大丈夫か！？氷魚っ」
瑪瑙は、慌てて氷魚を抱き上げると、榻（ながいす）に横たえた。
最近、氷魚はよく吐き気を感じるようになった。
特に、体調が悪いというわけではないのだけれど。
「うん、ごめんね、もう平気…最近、よく吐きそうになるの」
「風邪、ひいたのか？」
「う――――ん、分かんない」
「今日は、早く休んだ方がいいな、悪化するといけない」
「休ませてくれないクセに…」
上目づかいに見て、頬を膨らます氷魚を、しれっと聞き流そうとしたが、ふくれっ面の彼女に、思わず顔がゆるんでしまった。
「もう、やっぱり！瑪瑙～？」
「バレたか…」
「天河に聞こえちゃうでしょ、恥ずかしいじゃないっ」
「俺は別に？」
伸しかかり、耳元で瑪瑙は言う。
「ちょっと、ダメ、やだってば！」
氷魚は赤面しながら、じたばたする。
「いやいや、若いっていいねぇ」

突然、降ってきた天河の声に、瑪瑙は狼狽した。
「んなっ！てめえ、いつからそこにいたんだよ！？」
座っていた上階段の手すりから、フワリと着地する天河。
「いつだったかなぁ、忘れた」
ははは、と笑って頭を掻く。
「てめぇ――――――」
「おっと、暴力はナシだよっ」
「うるせぇ、一発殴らせろ」
「わー、暴力反対！」
「ふぅ…」
どたばた、と駆けまわる二人を尻目に、内心、助かったと思った氷魚である。
しかし、頭の痛くなる種が、また一つ増えたのも事実だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1007a/

幻夢抄録―目覚め―１１章

2010年10月11日03時58分発行